＜研究報告＞

中国人学習者の日本語複合動詞に関する意識・習得調査

郭恬　東京外国語大学大学院博士課程
徳井厚子　信州大学教育学部言語教育講座

キーワード：複合動詞，学習者の意識・習得状況，誤用分析，中国人学習者

１．はじめに

日本語の中には，複合動詞が多く存在している。森田（1991:280）が，『例解国語辞典』を調査した結果によると，収録語の11.4%強が動詞で，そのうちの39.29%が複合動詞であるという。実際に，評論，専門書等の知的水準が高く堅い文章から，報道，広告，手紙，日常的な文や会話，俗語に至るまで幅広く用いられている。日本語複合動詞の研究も，多角的に進められている。しかし，日本語複合動詞の研究は日本語教育の分野では，まだ未開拓の領域であり，研究はまだ不十分である。非母国語話者の日本語学習者にとって，複合動詞の習得はとても難しい問題である。森田は「学習者が日本語を学ぶ場合，教科書によって与えられる動詞のほとんどは単純動詞である。学習者は個々の単純動詞の意味・用法には習熟するが，それらの動詞を組み合わせた複合動詞については，学習の機会があまりない。したがって，複合動詞に関する知識が不十分なまま上級段階に進んでしまい，夥しい複合動詞の波にぶつかって困惑することになる。」と述べ，複合動詞の習得の難しさを指摘している（森田 1978:79）。また，松田文子は「複合動詞は日本語を豊かにするものではあるけれども使わなくても意味が通じることが多いため，学習者は使用を回避してしまう傾向が強く，習得が進みにくい」と述べている（松田 2002:52）。それにも関わらず，現在の日本語教材の開発，または教育現場の実際状況から見ると，大きく立ち遅れていることは確かである。

中国語の中にも，複合動詞は数多く存在している。日本語と中国語の複合動詞は意味的，統語的な共通点は観察できるにも関わらず，一対一に対応するというわけではない。中国国内で日本語を専門として勉強している中国人学生と日本に留学している中国人留学生が，複合動詞についてどのような意識を持っているのか，複合動詞の意味・用法を実際にどの程度把握しているのか，また習得の上でどのような問題点が見られるかを解明するため，日本語を専攻する中国人学習者116名に複合動詞に対する意識・習得調査を行った。

２．調査について

2.1 調査の目的

(1) 中国人学習者は複合動詞についてどのような意識を持っているのか。

(2) 日本語の複合動詞の意味と用法を，中国人学習者はどのぐらい習得しているのか。

(3) どのような誤用が見られるのか，またその原因は何か。

(4) 習得の上でどのような問題点があるのか。

(5) 以上の四点を踏まえ，日本語教育において，どのような点に注意して指導すれば良いか。

2.2 調査の概要

(1) 実施時期：アンケート調査は，2008年7月から2008年9月まで実施した。

(2) 対象者：被調査者は大連外国語大学日本語学部三年生33名，四年生61名，信州大学留学生10名，MANABI日本語学校二年生12名，合計116名である。

(3) 調査方法：調査はアンケート調査表を配布し，2週間程度の後回収する方法をとった。

(4) アンケート調査票：アンケート調査票は日本語，中国語で作成し，選択・自由回答・無記名式をとった。質問内容は二つに大別した形で構成した。第一部は日本語の複合動詞に関する中国人学習者の意識と習得の自己評価についての質問である（本稿では略して「意識調査」と呼ぶ）。第二部は文中の下線部の中国語を日本語の複合動詞に訳す15個の問題（本稿では略して「中訳日問題」と呼ぶ）と文中の下線部の日本語の複合動詞を中国語に訳す15個の問題（本稿では略して「日訳中問題」と呼ぶ）となり，計30問である。文例の難易レベルについては，日本語能力の中級程度で理解できるような語彙及び文型を選んで作成した。複合動詞を選ぶ基準については，まず日本語複合動詞の分類法を参考し，様々な結合様式と意味構造を持っている複合動詞を極力網羅するように注意を払った。また，『複合動詞資料集』（野村・石井1987:258-270）の前・後接率順構成要素表を参考し，使用頻度が高く，造語力の強い構成要素を選ぶことにした。アンケートに使用した複合動詞は以下である。

表1. アンケートに使用した複合動詞

【中訳日問題】		【日訳中問題】	
1	哭喊→泣き叫ぶ	1	待ち望む→等待，翘首盼望
2	看完→読み終える，読み終わる，読み切る	2	打ち切る→中止，中断
3	（连续）下→降り続ける，降り続く	3	踏み潰す→踩死，踩烂
4	哭起来→泣き出す，泣き始める	4	取り付ける→安装
5	仰望→見上げる	5	落ち込む→情绪低落，消沉
6	吞下去→飲み込む	6	やりぬく→坚持到底，做到底
7	打死→撃ち殺す	7	引き返す→折返，返回
8	镇定→落ち着く	8	見下ろす→俯视，向下看
9	互相帮助→助け合う，協力し合う	9	繰り返す→反复，重复
10	推倒→押し倒す	10	書き直す→重写
11	走累→歩き疲れる	11	しゃべりまくる→滔滔不绝
12	重新考虑→考え直す	12	引き立てる→衬托

13	取消→取り消す，打ち切る	13	分かち合う→分享
14	说得过分→言い過ぎる	14	立ち上がる→站起来
15	烧死→焼け死ぬ	15	疲れ果てる→很疲劳，累死了

(5) 回収率：116名（100%）。

(6) 有効回答：第一項の意識調査は，116名の回答は全部有効回答となっている。「中訳日問題」の有効回答は，大連外国語三年生25名，大連外国語四年生30名，信州大学留学生9名，日本語学校二年生4名，計68名となっている。「日訳中問題」の有効回答は，大連外国語三年生30名，大連外国語四年生30名，信州大学留学生9名，日本語学校二年生10名，計79名となっている。

2.3 回答者属性

(1) 学校と学習年数：中国大連外国語大学の三年，四年生は大学で初めて日本語を専門として勉強し，日本での滞在歴がなく，学習時間は500時間以上であり，中級，あるいは上級日本語コースを終了したレベルの学習者である（日本語能力試験1級，2級程度に相当）。調査対象を選んだ理由はそのレベルでないと複合動詞を履修していないため，その表現が理解できないと考えられるからである。信州大学留学生は日本での滞在歴が二年以上，信州大学で日本語以外を専攻している留学生である。国内での学習歴はそれぞれ違うが，日本での授業は日本語で行われているため，日本語のレベルは中・上級に当たると考えられる。日本語学校二年生は国内での学習歴がなく，日本で初めて語学留学の形で日本語を学習する学習者である。学習期間は一年半であり，日本語のレベルは初・中級に当たると思われるが，日本で生活しているため，校外の学習時間を考慮に入れ，調査対象にした。

(2) 使用する教材書：中国の中国人学習者が主に使っている教材は大連外国語大学が編集した『日本語精読』『新大学日本語』『基礎日本語』『漢訳日精編』『上級日本語』であり，日本に留学している学習者が主に使っている教材は『みんなの日本語』『標準日本語』『新編日本語』『日本課程ニューアプローチ』『中級日本語』である。

3．調査結果と考察

3.1 学校以外で日本語に触れる機会

現在，日本語教育の現場では，教科書によって与えられる動詞のほとんどは単純動詞であり，また，指導者の説明も不足しているので，学校で複合動詞を学習する機会があまりない。学習者が学校以外の場面で，特に日本の文学作品，テレビ番組など生の教材を通して複合動詞に触れることが多い。故に，学習者たちに対して，学校以外で日本語に触れる機会について調査を行った。調査結果は以下の円グラフの通りである。

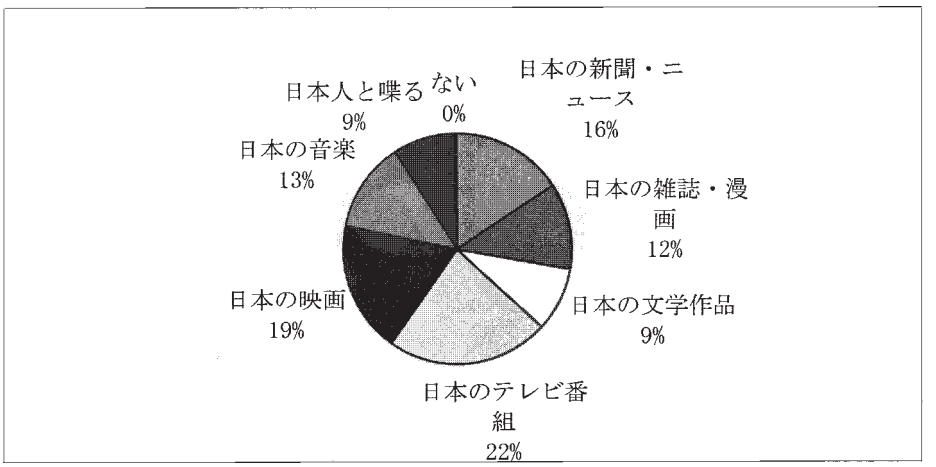

図1. 学校以外で日本語に触れる機会

項目別で見ると，「日本のテレビ番組」は22%と最も多く，「日本の映画」は二位の19%となっている。視覚的な情報で日本語に頻繁に触れていることがわかる。この場合は，視覚的情報が補足情報となり，理解を促すこともあれば，視覚的情報に頼ることで聞き取れなかった単語や，初めて聞いた単語を聞き流すことも多いだろう。音楽は聴覚情報であるが，視覚的情報と同様に，複合動詞があっても，聞き流す可能性が高い。また，「日本の音楽」は13%，「日本の漫画・雑誌」は12%となっている。漫画・雑誌は，挿絵や写真が多く，特に漫画は口語で書いてあるため，複合動詞の出現頻度が低いと想定できる。「日本の新聞・ニュース」は16%となっている。新聞には複合動詞の頻度が多いことが予想できる，新聞を読むことで習得につながっているかどうかは不明である。一方，ニュースは聴覚情報で複合動詞も使われていることが予想できるが，聞き流している可能性もある。

一方，様々な動作状態を的確且つ豊かに表現するため，複合動詞が多く使われていることが予想できる「日本の文学作品」は9%となり，最も下位である。「日本の文学作品」と同じく9%となっているのは「日本人と喋る」である。日本人と喋ることは，以上取り上げた七つの項目のうち，唯一のアウトプット行為であり，複合動詞を積極的に使うチャンスであるが，特に中国に住む学習者は日本人と喋る機会は少ないのが現実である。

3.2 日本語の複合動詞の学習に関する意識と現状

(1) 調査結果：日本語の複合動詞に関する意識は以下の円グラフの通りである。

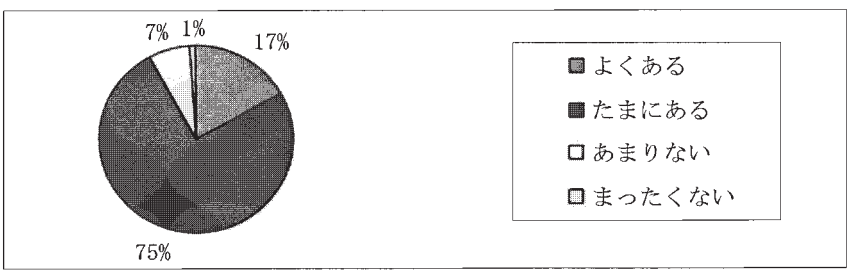

図2. 授業で複合動詞について教わったことがありますか?

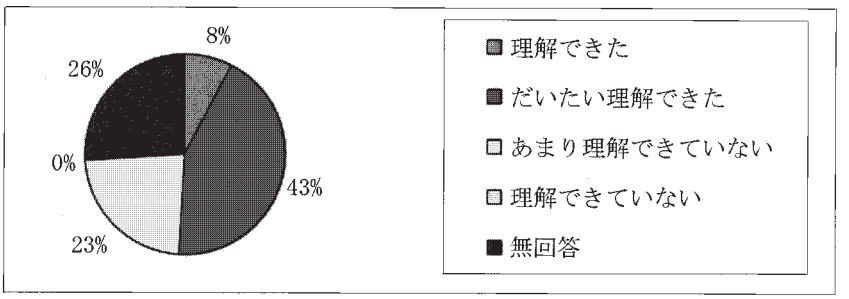

図３. その教科書にある複合動詞についての説明はあなたにとって十分理解できましたか？

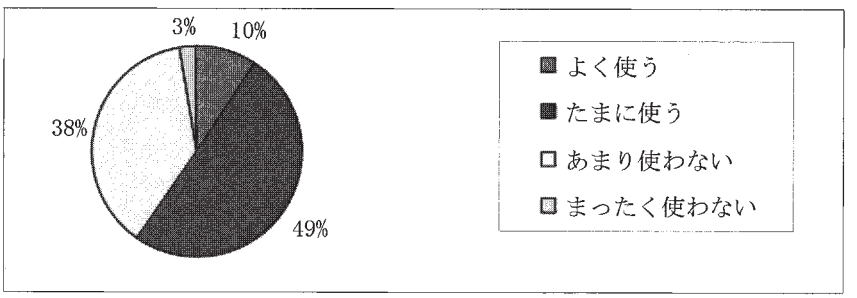

図４. あなたは現在，実際に話したり，文章を書いたりする時，複合動詞を使いますか？

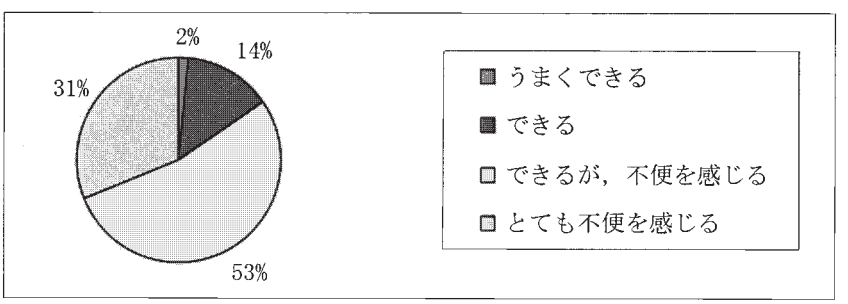

図５. あなたは，複合動詞について，詳しく分からなくても，コミュニケーションがうまくできると思いますか？

(2) 考察：まず，授業で複合動詞について教わったことがあるかについては，「たまにある」(75%) が最も多いことから，指導上あまり重視されていないことが予想できる。あるいは指導されてもそれほど学習者の記憶に残っていない可能性も考えられる。また，教科書にある複合動詞についての説明は理解できたかという質問について，「だいたい理解できた」(43%) が最も多いが，アンケートの第二部の 15 問の正解率は 50%を下回っている。つまり理解していると思い込んでいるが実際は誤用が多いという結果が出ている。一方，学習年数の最も長い信州大学留学生の回答では「あまり理解できていない」(30%) が最も多いのに対して，学習年数の最も短い日本語学校二年生は「あまり理解できていない」(17%) が最も少なかった。つまり学習年数の多いグループの方が，少ないグループよりも理解できていないという意識が高かったのである。その原因は複合動詞の習得への認識の差であると考えられる。中国人学習者にとって，多くの複合動詞は，漢字を見れば大体の意味が推測できる。複合動詞に対する認識が不足している場合，前項動詞

と後項動詞の単独の意味が理解できれば，複合動詞の意味が分かると思い込む傾向もある。さらに，複合動詞は日本語を豊かにするものではあるが使わなくても意味が通じることが多いため，学習者は使用を回避してしまい，問題を感じないと予想できる。学習年数の少ない学習者の場合，初めて見た複合動詞であっても，漢字があり，前項動詞と後項動詞の意味が分かれば，自分は把握していると思いがちである。一方，学習年数が増えるにしたがい，様々な場面で実際に複合動詞を見たり，訳したり，使ったりして，さらに高レベルの日本語を目指す時，自分は複合動詞をうまく習得していないと意識してしまう。また，教科書の説明については「だいたい理解できた」(43%) が最も多いのに対して，実際に使うかどうかについては「よく使う」は10%と低く，「たまに使う」は (50%) であり，コミュニケーションがうまくできると思うかどうかについては「できるが，不便を感じる」(53%) が最も多くなっている。つまり，理解できたと意識する割合は多いが，それに比して実際の使用に関してはそれほど多くなく，コミュニケーションについても不便を感じている割合が多い。すなわち，日本語複合動詞の習得について，学習者の自己評価と実際の使用能力との間に，学習者が気付いていないギャップが存在している。学習年数の少ない学習者の間で，この問題は特に顕著である。

3.3「中訳日問題」の正解率の分析

(1) 調査結果：先にあげた15語の複合動詞の正解率は以下のようになっている。

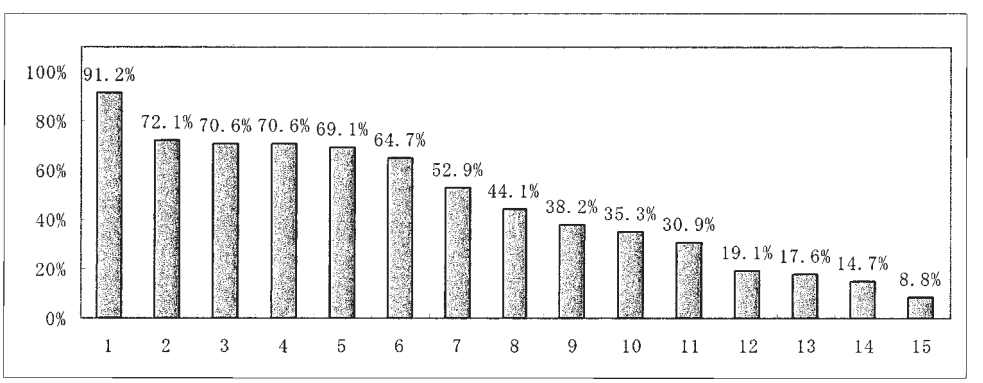

図6.「中訳日問題」の平均正解率

なお，図6におけるそれぞれの番号は以下の語を示す。

1 読み終える　2 降り続く　3 泣き出す　4 言い過ぎる　5 考え直す　6 落ち着く
7 泣き叫ぶ　8 取り消す、打ち切る　9 助け合う　10 歩き疲れる　11 飲み込む
12 押し倒す　13 焼け死ぬ　14 撃ち倒す　15 見上げる

(2) 考察：全体的に，平均正解率は46.7%であり，50%を下回っている。また，「中訳日問題」の正解率には次のような傾向が見られた。

①アスペクト複合動詞[1)]が圧倒的に上位を占めている。

日本語にも中国語にも，アスペクト動詞を含む複合動詞が存在し，日本語も中国語もアスペクトに関する動詞が後項の位置に置かれる点では一致しているという共通点があ

るので，中国人学習者にとって，アスペクト複合動詞は比較的習得しやすいのだろう。その中でも，特に注意すべきなのは，「～出す」の複合動詞である。「～出す」「～出る」のもともとの意味は［人ガ］［物ヲ］（中から）（外へ）出すという型で，「ものの外への動き」を表す。しかし，「走り出す」の場合，「出す」は「開始」を表している。このような点が日本語学習者を悩ませる。今回の調査の中で，「哭起来」を日本語に訳す問題について，「泣き始める」と答えた学習者は「泣き出す」と答えた学習者より明らかに多いことがわかった。この結果から，「開始」の意を複合動詞で表す時，多くの学習者が「～始める」を選ぶということがことがいえる。

②結果複合動詞の正解率が下位となっている。

「歩き疲れる（35.3%）」は第10位，「押し倒す（19.1%）」は第12位，「焼け死ぬ（17.6%）」は第13位，「撃ち殺す（14.7%）」は第14位となり，いずれも10位以下となっている。誤用について，最も多いのは自動詞と他動詞の誤用である。その原因は，中国語では，自・他同形の動詞が多数存在することや中国語の複合動詞の後項動詞にストレートに動作の結果を示す自動詞がくることが多いからと考えられる。特に今回のアンケートに出ている「焼け死ぬ」と「撃ち殺す」は，中国語では“烧死”と“打死”となり，後項動詞は同じく「死」であるため，学習者の戸惑いが想像できる。

③熟語複合動詞[2]の正答と誤答は質的に両極端になっている。

熟語複合動詞「落ちつく（64.7%）」，「取り消し（44.1%）」は第6位，第8位となり，正解者は半数程である。誤答については，造語が少なく，フレーズや文に言い換えることが多い。そして，正解の場合は熟語として正確に書くことができ，誤答の場合は全く違う言葉にする，あるいは空欄にする傾向が見られる。それも熟語複合動詞の持っている熟語の性質によるものだろう。熟語複合動詞は前・後項動詞が一体化して，構成素のもとの意味とまったく違った新しい意味を持っているため，学習者には一つの新出単語として捉えられていると言える。したがって，学習上は一度覚えてしまえば使用する時に間違える可能性が低い。一方，学習したことのない場合は，前項動詞と後項動詞から意味を推測することがほぼ不可能であるため，誤答になる確率も非常に高い。

3.4「日訳中問題」正解率の分析

(1) 調査結果：先にあげた15語の複合動詞の正解率は以下のようになっている。

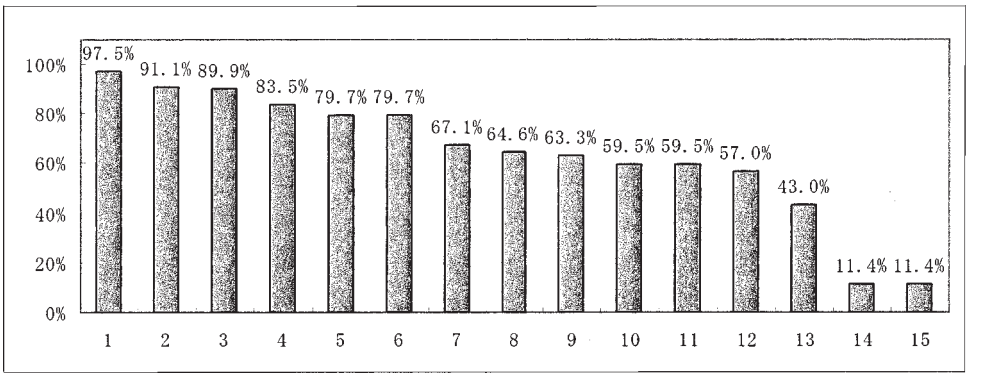

図7.「日訳中問題」の正解率

なお，図7におけるそれぞれの番号は以下の語を示す。

1待ち望む　2繰り返す　3書き直す　4見下ろす　5落ち込む　6引き返す
7やりぬく　8打ち切る　9取り付ける　10分かち合う　11踏みつぶす
12立ち上がる　13疲れ果てる　14しゃべりまくる　15引き立てる

(2) 考察：全体的に，「日訳中問題」の平均正解率は63.9%であり，「中訳日問題」の46.7%より20%程度上回っている。ここから，複合動詞の習得において，理解はほぼしているが，運用はできていないという「理解」と「運用」のズレが存在していることが分かる。複合動詞は日本語を豊かにするものではあるけれども，使わなくても意味が通じることが多いため，学習者は使用を回避してしまう傾向が強く，習得が進みにくい。加えて，多くの複合動詞は前項動詞と後項動詞によって全体の意味をだいたい推測することができるので，理解できていると思いがちである。したがって，多くの中国人学習者は，初めて複合動詞と出会う時，漢字を見れば意味がおおよそ推測できると思い込みがちであるため，新出単語としてしっかり記憶しようとしないことが多い。その結果，正確な記憶ができていないため，二つの事象を表したい時に，複合動詞の使用を回避し，意味の近い単純動詞を使用することになってしまう。故に表現が単調で幼くなってしまい，表したい事象を思い通りに表現できない。よって，複合動詞の習得に当たっては，読む，聞くことができるだけで満足するのではなく，「ごまかし」の利かないアウトプットの行為――話す，書くなどの産出行動ができるまで，しっかり習得しなければならない。また，「日訳中問題」の正解率から，以下のような傾向が見られた。

①前項動詞と後項動詞の意味変化がない複合動詞が圧倒的に上位を占めている。

「待ち望む（97.5%）」，「書き直す（89.9%）」，「見下ろす（83.5%）」のように，前項動詞と後項動詞が本来の意味を保っている複合動詞の正解率は非常に高い。前項動詞と後項動詞の意味を把握していれば，簡単に複合動詞の意味が推測できるため，学習者にとって，理解しやすい種類である。しかし，「中訳日問題」では，その傾向はそれほどはっきり見られない。それは，「中訳日問題」の場合，単に意味を理解することだけではなく，自分で書くため，自・他，接続などの問題が関係してくるからだろう。

②V1－v2[3] 型複合動詞の正解率が下位となっている。

「分かち合う（59.5%）」は第10位，「疲れ果てる（40.3%）」は第13位，「しゃべりまくる（11.4%）」は第14位となり，いずれも10位以下となっている。誤用について，最も多いのは前項動詞の意味のみに頼り，後項動詞の補充的意味を無視することである。また，後項動詞の意味が分からないため，自分の想像に任せて意味を付加することもある。例えば，「喋りまくる」を「独り言を言う」と訳した学習者が多数いる。後項動詞が平仮名であるため，意味を推測しにくいことも一つの原因だろう。また，意味的な角度から見ると，以上取り上げたV1－v2型複合動詞の殆どは後項動詞が強意の意を添える複合動詞である。強意の意を添える複合動詞は，v2がV1の表す意味を強めて，強調の表現効果を果たす。「恐れ入る→ 非常に恐れる」のように，v2は元来の意味を持たず，ただV1の動作の程度を強調している接尾辞的な存在になる。この現象は中国語にもしばしば見られる。「甚词」と呼ばれるもので，程度補語の形を取って表す。よく使う「甚词」として，「极，死，直，痛，」などがあり，日本語と殆ど対応していない。例えば「涸れあがる（干透了）」「震えあがる（直发抖）」といったものがある。したがって，中国人学習者にとって，後項動詞が強意の意を添える複合動詞の場合では，日本語を中国語に訳す時にも意味を推測することが難しく，中国語を日本語に訳す時にも間違いやすい。

③熟語複合動詞の正答と誤答は質的に両極端になっている。

熟語複合動詞の「繰り返す（91.1%）」，「落ち込む（79.7%）」，「打ち切る（64.6%）」は第2位，第5位，第8位となり，かなり上位を占めている。一方，「引き立てる（11.4）」は最下位となっている。その結果も前項で述べたように，熟語複合動詞の持っている熟語の性質によるものだろう。

4．中国人学習者における日本語複合動詞の誤用分析

前項では，調査に関して，その概要と結果について述べてきた。第一部の意識調査を通して，中国人学習者の複合動詞に対する意識をある程度把握することができた。また，第二部の「中訳日問題」と「日訳中問題」の結果からは，中国人学習者の複合動詞における習得レベル・誤用傾向が明らかになった。そこで，以下では後者の調査結果に着目し，誤用分析[4] を行いたい。

4.1「中訳日問題」と「日訳中問題」の誤用例

アンケート調査表の第二部の「中訳日問題」と「日訳中問題」において，以下のような誤用が見られた。（括弧の中の数字は間違いが出現する回数である）

表2.「中訳日問題」の誤用

【中訳日問題】		
番号	複合動詞	誤用

1	哭喊→泣き叫ぶ	叫ぶ (4)，泣く，泣き出す (4)，叫びだす (3)，泣き言う，大声で叫ぶ，号泣した，泣き喚いた
2	看完→読み終える，読み終わる	見終わる (4)，見る，読む
3	(连续) 下→降り続ける，降り続く	降る，続く，降り止める，止む，持ち続く，あがる，降りつける，降りつつ
4	哭起来→泣き出す，泣き始める	泣く，泣きつく，泣きてくる，泣き出る (3)，泣きあがる (3)，泣いて始める，泣き起こす，泣いて叫ぶ，叫ぶ，泣き起こる
5	仰望→見上げる	見あがる (3)，仰ぎ望む (9)，上り望む，見仰ぐ，望みあげる (2)，仰向き見る，仰ぐ (3)，仰ぎ見る (7)，仰いで望む
6	吞下去→飲み込む	食べる，込む，飲む (3)，食べ込む (6)，食べ含む，食いだす，飲み下がる，飲んでしまう，飲込む，飲下する
7	打死→撃ち殺す	殺す，撃つ，打ち死ぬ (10)，死に打つ (5)，打って殺す (3)，死にする，シュートする，打っ死ぬ，打ち潰す，銃殺する
8	镇定→落ち着く	込ちつく，平気する，平気にする，静まる，心配しないで，落ち着ける，落ち組む，おとつく，ゆっくりして
9	互相帮助→助け合う，協力し合う	お互いに助ける (14)，合い助ける，お互い手伝う，お互い助ける，手伝い合う，相互に助ける (2)
10	推倒→押し倒す	押し倒れる (11)，押し倒る，押さえる，倒される，倒す，推倒する，よこに推む，倒す，押し転ぶ，倒れきる
11	走累→歩き疲れる	疲れる (6)，歩い疲れる (4)，歩いて疲れる (4)，走り疲れる (3)，疲れ歩く，あるきづかれる，歩く疲れる
12	重新考虑→考え直す	考える (10)，考慮し直す，改めて考える (3)，見直す
13	取消→取り消す，打ち切る	キャンセルする (10)，やめる (3)，取り消える (2)，取消する，とり締まる，打ち取る
14	说得过分→言い過ぎる	話しすぎる (4)，ひどい (3)，言うのがひどい，いいひどい，行き過ぎる，言い迫す，言いあんまりすぎ
15	烧死→焼け死ぬ	焼き死ぬ (16)，焼いて死ぬ (3)，焼かれて死ぬ (2)，焼け殺す，焼き殺される，焼かれて死んだ，死んだ

表3.「日訳中問題」の誤用

【日訳中問題】		
番号	複合動詞	誤用

1	待ち望む→等待，翘首盼望	なし
2	打ち切る→中止，中断	实施，决定，提出，开始，商定好
3	踏み潰す→踩死，踩烂	践踏，崩溃，破坏，踩
4	取り付ける→安装	取来，取下
5	落ち込む→情绪低落，消沉	落入，平静，镇静
6	やりぬく→坚持到底，做到底	坚持，没完成
7	引き返す→折返，返回	回来，半途而废
8	見下ろす→俯视，向下看	眺望，下来
9	繰り返す→反复，重复	再一次
10	書き直す→重写	修改
11	しゃべりまくる→滔滔不绝	自言自语，说
12	引き立てる→衬托	显眼，穿着，强调，鼓励，提升，格外漂亮
13	立ち上がる→站起来	上升，好转，重新开始，战胜，恢复，摆脱
14	分かち合う→分享	分合，打破
15	疲れ果てる→累死了，精疲力尽	累

4.2 誤用のパターンと原因

誤用例を全般的に見ると，誤用のパターンとその原因は以下のようにまとめることができる。

①a. 前項動詞と後項動詞の片方だけを使う。

例：考え直す→考える　　押し倒す→推す，押す，倒す

b. 複合動詞の意味をよく理解していない，また，複合動詞の使用を回避するため，意味の近いフレーズや短い文などで代用する。

例：言い過ぎる→言うのがひどい　　取り消す→キャンセルする

分析：このパターンは3.4で述べた「複合動詞の回避」による誤用であると思われる。

②接続の法則「前項動詞の連用形＋後項動詞」を把握していないため，接続の誤りが多い。

例：歩き疲れる→歩いて疲れる，歩く疲れる，あるきづかれる　　撃ち殺す→打って殺す

分析：複合語の結合パターンには，様々な結合様式がある。複合語の構成の規則をまとめてみると，以下の三つの規則がある。

i　活用語の場合，前要素の形が次のように変わる。

・動詞は連用形に　・形容詞や形容動詞は語幹に　・副詞（擬態語）は語基に

ii　原則として後要素の品詞が複合語全体の品詞となる。

・動詞「飲む」＋名詞「薬」→名詞「飲み薬」

iii　後要素に連濁現象が起こりやすい。但し，前と後の要素が対等な関係の場合（うえ＋した→うえした）や複合動詞には起こりにくい。

学習者は複合語の構成規則について，少し触れた程度で，しっかり習得できていない場合，複合語の構成規則を間違って使うことが多い。どんな時連濁現象が起こりやすい

のか，接続する時，動詞は連用形をとるのか，それとも語幹をとるのかなどについて，確実な知識を把握していないため，誤用が生じてしまう。

③自動詞と他動詞の混同による誤用が多い。

例：焼け死ぬ→焼き死ぬ　　撃ち殺す→打ち死ぬ

分析：日本語では，一般に対象格を取らない動詞を自動詞，対象格を取る動詞を他動詞としている。この日本語における自動詞と他動詞の区別は中国人学習者にとっては難関の一つである。日本語の自動詞・他動詞は意味の上から区別されるだけではなく，形態的に自動詞と他動詞とが対応しているものがある。例えば，「始まる—始める」「消える—消す」「直る—直す」などがそうであり，このような対応関係を有するものを「自他の対応」と呼んでいる。それは日本語教育においては初級レベルの教科書の多くで提示される項目である。しかし，学習者にとって使い分けが難しいとされ，上級レベルの学習者であっても誤用が目立つ。その原因は二つあると考えられる。一つは，中国語の動詞意識による発想のずれが生じることである。もう一つは，日本語の自動詞と他動詞がはっきりと区別できないことである。

中国語の動詞では，動詞と名詞部分の位置関係によって自動詞と他動詞が区別され，動詞自体の形態による区別がない。このような中国語動詞の特徴も，日本語の自動詞・他動詞の習得に大きな支障をもたらすと考えられる。また，自・他動詞の誤用は結果複合動詞の中でよく見かける。中国語の結果複合動詞では，二つの述語が組み合わさって，「原因又は先行事象－結果事象」を表す。前項述語は，非能格動詞，非対格動詞及び他動詞と，全ての種類の述語が担うことが可能である。一方，後項述語は結果状態を表すために，ほとんどの場合において，状態変化を表す非対格動詞，形容詞が担う。それは日本語複合動詞の「他動詞調和の原則」に反しているので，指導する時に，充分に配慮する必要がある。

④前項動詞あるいは後項動詞を類義語に置き換え，存在しない造語を作り出す。

例：助け合う→手伝い合う，お互い助ける　　飲み込む→飲み下す，食べ込む

分析：これは「結合条件」に関するものである。非母語話者の中国人学習者にとって，どんな動詞に結びつくことができるのか，何故「飲み込む」と言えるのに，「食べ込む」「食べ下す」と言わないのか，よく分からない。そのため，勝手に単語を作り出す危険性がある。この点を説明するためには，まず，第一に，「他動性の調和の原則」や「主語一致の原則」に即して説明する。その際，「食べ込む」，「食べ下す」は結合条件の規則に合わないいわゆる「構造上の空白」（structural gap）なのか，構造上は結合し得る条件を持っているがたまたま他の要因によって使われない「偶然のギャップ（accidental gap）なのかという問題も併せて考える必要があるだろう（松田2002：174）。そして，大枠の結合条件だけでなく，もう少し意味の側面で説明することが必要である。

⑤中国語を直訳して存在しない語を作り出す。

例：取り消し→取消する　　泣き出す→泣き起きる

分析：以上の誤用例は二つとも母語干渉による誤用と判断できる。「取り消し」を「取消する」と間違えるのは中国人学習者の母語干渉による誤用の典型的な例である。「学习」＝「学習する」，「研究」＝「研究する」のように，多くの漢語動詞は中国語の動詞と対応しているため，「二字漢語＋する」という形のサ変動詞は中国人にとって，習得しやすい。したがって，中国人学習者は動作・状態を表現する時，非常に「二字漢語＋する」型のサ変動詞を非常に好む。しかし，サ変動詞になる二字漢語・ならない二字漢語，日本語に存在する二字漢語・存在しない二字漢語があるため，それを区別できるような知識量があるかどうかが問題となる。また，中国語では，「泣き出す」は「哭起来」と言う。中国の始動相アスペクト複合動詞は「～起来」のような構造を取るため，「泣き起こす」のような誤用が出てきたと思われる。

５．まとめ

以上，アンケート調査を通して，中国人学習者の複合動詞についての意識と習得状況を明らかにした。意識調査においては，複合動詞の重要性への認識が不足しているため，教科書と指導者の説明が不十分であることが分かった。そして，複合動詞の習得に当たって，「理解できる」と「使用できる」との間に大きなギャップがあることが分かった。また「日訳中」と「中訳日」問題から見られた誤用例を分析し，学習者がよく間違える問題点を探った。日本語複合動詞に関する誤用のパターンとそれぞれの原因は以下の五つにまとめることができる。

① 複合動詞の使用を回避し，意味の近い単純動詞，フレーズや短い文などで代用する。
② 「前項動詞の連用形＋後項動詞」という接続の法則を把握していないため，接続の間違いが多い。
③ 自動詞と他動詞の混同による誤用が多い。
④ 結合条件が分からないため，前項動詞あるいは後項動詞を類義語に置き換え，存在しない造語を作り出す。
⑤ 中国語を直訳して存在しない語を作り出す。

以上まとめた学習上の問題点から，今後の課題としてはまず，日本語教育における複合動詞の位置づけを見直さなければならないことが挙げられる。また，「使用の回避」という日本語複合動詞の学習上の最も大きな問題点を重視し，「理解できる」だけではなく，「使用できる」を心がけなければならない。教育現場の教師と連携し，現場での指導経験を活かし，複合動詞に関する基礎研究を積極的に実践に結びつけ，効率的な指導法を体系的に考案することやテキストを開発することは，これからの重要な課題である。

謝　辞

本稿の執筆に当たり、山本清隆先生、および調査にご協力いただきました大連外国語学院の李燕先生、日本語学校MANABIの先生方、佟利功さん、そしてアンケートの回答者のみ

なさまにお世話になりました。心から感謝申し上げます。

【注】

1) アスペクト複合動詞とは，後項動詞が前項動詞にある種のアスペクト性を付加する複合動詞である。
2) 熟語複合動詞とは，前項動詞，後項動詞ともに単独で元の文に埋め戻しても文が成立しない，結合してまったく元の意味と違う意味を持つ複合動詞である。
3) V1－v2型複合動詞とは，前項動詞が意味の上で主たる役割を持っており，後項動詞は補助的な役割を持っている複合動詞である。
4) 「中訳日問題」において，複合動詞を使わなかった場合，翻訳が正しくても，「誤用」と呼ぶことにする。

【参考文献】

(1) 森田良行（1978）「日本語の複合動詞について」『講座日本語教育』14, 69-86. 早稲田大学語学教育研究所
(2) 野村雅昭・石井正彦編（1987）『複合動詞資料集』国立国語研究所
(3) 寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
(4) 山本清隆（1984）「複合動詞の格支配」『都大論究』21, 32-49. 東京都立大学国語国文学会
(5) 早津恵美子（1987）「対応する他動詞のある自動詞の意味的・統語的特徴」『言語学研究』7, 79-109. 京都大学言語学研究会
(6) 望月圭子（1990）「日・中両語の結果を表す複合動詞」『東京外国語大学論集』40, 13-27.
(7) 林大編（1990）『日本語教育ハンドブック』大修館書店
(8) 森田良行（1991）『語彙とその意味』アルク
(9) 姫野昌子（1999）『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房
(10) 松田文子（2000）「複合動詞の意味理解方略の実態と習得困難点」『言語文化と日本語教育』20, 52-65. お茶の水女子大学日本言語文化学研究会
(11) 劉月華等（2001）『実用現代漢語語法』商務出版社
(12) 野田尚史（2001）『日本語学習者の文法習得』大修館書店
(13) 松田文子（2002）「複合動詞研究の概観とその展望 —日本語教育の視点からの考察—」『言語文化と日本語教育』5, 170-184. お茶の水女子大学日本言語文化学研究会
(14) 横山紀子（2004）「語の意味の習得におけるインプットとアウトプットの果たす役割」『日本語国際センター紀要』11, 1-12. 国際交流基金日本語国際センター
(15) 陳曦（2004）「中国人学習者における複合動詞の習得に関する一考察—「～あう」と「～こむ」の理解に基づいて—」『ことばの科学』17, 59-80. 名古屋大学言語文化研究会

（2009年８月25日　受付）
（2009年12月17日　受理）